



交流スペースから富士山をのぞむ

## もくじ

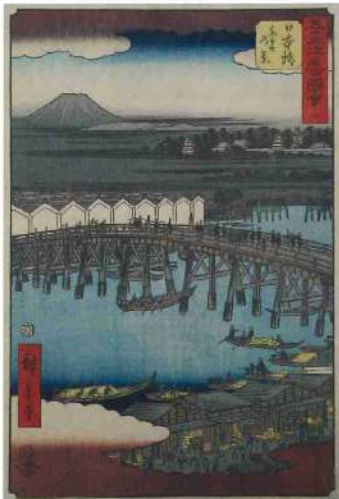
### 展示紹介

広重の豎絵東海道勢ぞろい   2Daysの京旅行 .....	P 1
12Daysで日本橋から京へ? .....	P 2
「浮世絵が描く鎌倉幕府の物語」振り返り① .....	P 4
「浮世絵が描く鎌倉幕府の物語」振り返り②/浮世絵こぼれ話 14 街道の景色 ..	P 5
二代目オニカゲ学芸員のページ⑥	
任命! 屏風調査係~未知なる絵師を求めて/浮世場なれ/編集後記 .....	P 6

# 広重の豎絵東海道勢ぞろい 12Daysの京旅行

会期

2022年2月22日(火)~4月17日(日)



歌川広重「五十三次名所図会  
一 日本橋 東雲の景」



歌川広重「五十三次名所図会  
四十五 石薬師 義経さくら範頼の祠」



歌川広重「五十三次名所図会  
五十五 大尾 京 三條大はし」

江戸の日本橋から京の三条大橋までを結ぶ東海道は約126里6町1間(約492km)あり、その道中には53の宿場がありました。当時の東海道の旅はおおよそ12日間程度要したとされています。東海道は道の整備や伊勢参りの大流行などにより、19世紀前半に多くの人が旅をする街道になり、様々な浮世絵師に描かれました。

歌川広重は20種余りの東海道シリーズを描きました。「五十三次名所図会」(通称<sup>たてえ</sup>豎絵東海道)は晩年に描かれた作品です。縦の構図で特徴づけられている「豎絵東海道」は遠近感のある図や俯瞰図で構成されており、雄大な旅景色を遠くから眺めているかのように描かれています。本展では広重の「豎絵東海道」を日本橋から京まで全作品展示します。東海道の旅を江戸時代に戻ったような気分でお楽しみください。

## 12Daysで日本橋から京へ？



【図1】歌川広重「参宮上京道中一覽双六」

今回展示している作品の中に、「五十三次名所図会」と同じ絵師・歌川広重と版元・蔦屋吉蔵つたやきちざうによって手がけられた「参宮上京道中一覽双六」【図1】があります。こちらは画面右下の日本橋をスタート、画面右上の京もしくは伊勢のないくう内宮をゴールとする双六です。大きさは大判錦絵6枚分ほどで、鳥瞰図のような形式で東海道と伊勢参宮への道（伊勢路）を描いています。同時代

に発行されていた双六の多くは1マスごとにコマが設けられていたのに対して、こちらの双六は地名が書かれた赤い短冊をマスとしていたようです。遊んでも面白い、眺めても面白い、そんな一図だったのではないのでしょうか。

こちらの双六の、東海道を進む道中に「泊」（一回休み）が割り当てられている宿場は①戸塚・②小田原・③沼津・④江尻・⑤金谷・⑥浜松・⑦赤坂・⑧宮・⑨石薬師・⑩関・⑪草津の11宿。つまりこちらの双六では12日で日本橋から京へたどり着くことになります。

しかし、江戸時代の道中記などをみると、14、15日はかかったと書かれているものが多くなっています。それは東海道の道中は難所が多く、通るのに時間がかかることが多かったことと、東海道を旅する庶民の多くが日本橋から京に向かう道中に寄り道を楽しんでいたからでした。その代表が伊勢参りです。



【図2】図1①拡大図

「とつか」という宿場名の短冊に「泊」の字が添えられている。なお、戸塚宿は実際に東海道を日本橋から出発した際、最初に泊まる宿場として利用されることが多かった。

## 東海道から伊勢参り

東海道から伊勢に向かう道は日永（三重県四日市市）の追分、こちらの双六でいうと⑫四日市宿が分岐点となります。四日市宿の短冊の横に「この所にて長めをふれば東かいどう半めをふればいせぢへゆくなり」と書かれた短冊があります【図3】。つまり、四日市宿でサイコロを振って偶数（長め）が出ればそのまま東海道を進み、奇数（半め）が出れば伊勢路へと進むことになります。この奇数が出た場合が東海道から抜けて「伊勢参り」をする、伊勢への寄り道のルートとなります。



【図3】図1⑫拡大図



【図4】図1⑬拡大図



【図5】図1⑭拡大図

伊勢の内宮の部分には「一つあまれば ふるいち迄しゆくにかぞへ東かい道へでる」【図4】、⑬くもづ（雲津）には「もどりはここより おくもとせきとかぞへて東かい道へでる也」【図5】とあることから、伊勢の内宮ちょうどで止まれなければ引き返して「くもづ（雲津）→おくもと（棕本）→せき（関）」というルートで東海道に戻るようになります。実際の旅でも東海道から伊勢に寄り道をするには四日市の追分から抜けて伊勢に参った後、関から東海道に戻る、というルートを辿ったようで、途中で古市という江戸の吉原にも並ぶ歓楽街があったことも踏まえるとやはり2～4日程度は伊勢路で過ごすことが多かったのでしょう。なお、こちらの双六でも⑭松ざか⑮ふるいちが「泊」の場所になっており、伊勢街道に進んでから東海道に戻ろうとすると場合によっては2～4日程度追加となります。

日本橋から京まで、途中寄り道するもよし、脇目も振らず進むもよし、自分であればどのように行くだろうか、そんなことを東海道の名所絵や双六を楽しみながら妄想をしていた江戸時代当時の人々のように、今回の展覧会を楽しんでいただければと思います。

# 「浮世絵が描く鎌倉幕府の物語」振り返り①

前回の展示「浮世絵が描く鎌倉幕府の物語—個性豊かな御家人たち—」展（2021年12月21日～2022年2月13日）について川崎市浮世絵ギャラリー学芸員の山本野理子氏に展覧会評をご寄稿頂きました。

## 9代目市川團十郎熱演—荒法師・文覚上人

山本 野理子

藤澤浮世絵館開催の「浮世絵が描く鎌倉幕府の物語—個性豊かな御家人たち—」展は鎌倉幕府関連の浮世絵を紹介した展覧会で、武者絵を中心に役者絵、見立絵、戯画など様々なジャンルで構成された見ごたえのある内容となっていました。特に印象に残ったのが、本稿で紹介する豊原国周の役者絵「市川團十郎演芸百番 文学上人」です。歌舞伎役者9代目市川團十郎が様々な役柄に扮した揃物からの1枚で、本図では「橋供養梵字文覚」や「那智滝祈誓文覚」といった文覚上人を題材にした作品を演じる姿が描かれています。

文覚上人は平安末期から鎌倉初期に実在した僧で、もとは遠藤盛遠という名の武士でした。誤って袈裟御前を殺して出家し、諸国の霊場で苦行しました。のちに高雄山神護寺を再興し、源頼朝に挙兵を促したことで知られます。その超人的な逸話は『平家物語』や『源平盛衰記』に見え、能、人形浄瑠璃、歌舞伎などにも脚色されました。

図は那智の滝での荒行の場面を描きます。激しい滝に打たれて絶命しかかった文覚を、不動明王とその眷属の矜羯羅童子・制吒迦童子が救う、という筋書きです。金剛鈴（法具の一種）を口にくわえ、グツと天を睨む…。9代目團十郎の強烈な目力が発揮された迫力あるワンシーンです。

画中には俳人の晋永機（其角堂）による「関伽汲と二童子中より瀧さくら」の句が記されています。「関伽（仏に供える清水）汲む」とは、ここでは「滝行をする」という意味でしょう。荒行により信仰心を示した文覚の前に矜羯羅・制吒迦の二童子が「瀧さくら」すなわち桜の花びらのように飛び散る滝しぶきとともに現れた、という情景を詠んだものです。那智の滝の場面で9代目團十郎は文覚と不動明王の2役を早変わりして演じ、これが喝采を浴びて舞台におひねりが投げ込まれたと伝わります。「瀧さくら」は飛び交うおひねりの意味も含んでいるのかもしれませんが。（川崎浮世絵ギャラリー学芸員・美術史家・日本風俗史学会理事）



豊原国周「市川團十郎演芸百番 文学上人」

## 「浮世絵が描く鎌倉幕府の物語」振り返り②

鎌倉時代に活躍した武者の雄姿を浮世絵で紹介したと同時に、2021年12月1日に大庭城跡が市指定史跡に指定されたことを記念し、大庭城跡から出土された考古資料も展示しました。改めて、大庭城について文化財担当の学芸員が紹介します。

大庭城は大庭字城山おおばじょう おおばあざしるやまに所在する山城で、現在の研究では相模国の守護であった扇谷上杉氏の城館すぎしと考えられています。築城した人物や時期の詳細については不明な点が多いですが、扇谷上杉氏の歴代当主と非常に血縁が強い扇谷上杉朝昌ともまさという人物が大庭城を守護していたことが文献から確認されています。扇谷上杉氏は相模国の守護所が置かれていた相模国西郡が機能しなくなってからは、大庭城こそが相模国内にある扇谷上杉氏の中心地となっていったことでしょう。

なお大庭城は永正9年(1512)に伊勢宗瑞いせ そうずいにより落城し、その翌年に伊勢氏は玉縄城たまなわじょうの築城を開始したため、大庭城は使用されることなく廃城となったと考えられています。

ちなみに過去の発掘調査の結果、掘立柱建物群や、土塁や堀が見つかるほか、令和2年度から令和3年度にかけておこなわれた第25次調査では、主郭西側斜面から帯曲輪おびぐるわの存在が確認されました。県内で発掘調査の成果から帯曲輪が確認されたものは大庭城が初めてと思われます。



上空からみた大庭城跡

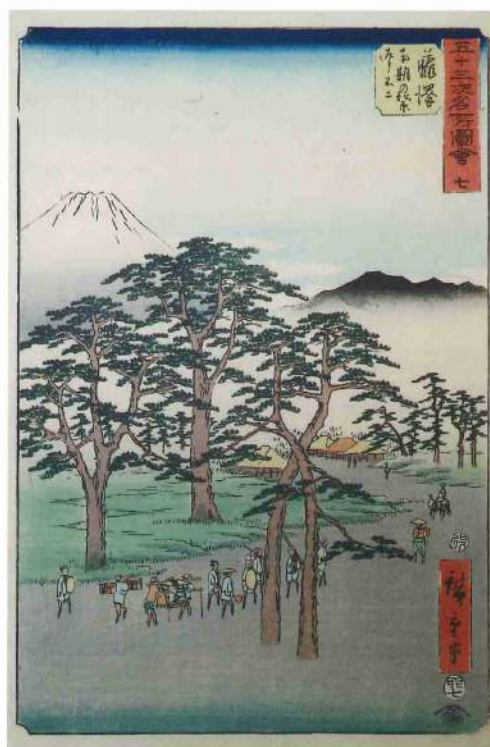
## 浮世絵のぼね話 14

### 街道の景色

街道を描いた浮世絵には松並木を描いた場面が度々登場します。実際江戸時代には街道に面して多くの松並木が植えられ、旅人を直射日光、雨風などから守りました。街道の並木は松をはじめ、杉、桜、柳などが植えられ、道に沿った木々は街道の目印にもなりました。

「縦絵東海道」の藤沢は藤沢宿そのものの光景ではなく、宿場周辺の街道の松並木を題材に取り上げています。描かれているのは南湖なんこ(茅ヶ崎市域)の松原です。縦の構図を利用して、高く伸び育った松並木と左手に見える雄大な富士をとらえています。小さく見える旅人は松並木の間の街道に沿って歩いています。そのほかに松並木は「縦絵東海道」のシリーズの中だけでも浜松、庄野、亀山などに描かれています。

松並木は東海道の旅の中ではよく見られた街道の景色だったのでしょ。



歌川広重「五十三次名所図会 七 藤沢 南期の松原左不二」



二代目オニカゲ学芸員のページ⑥  
任命！ 屏風調査係～未知なる絵師を求めて

藤沢市では浮世絵以外の郷土資料も多く所蔵しています。その一つが、今回東海道コーナーで展示している「題名不詳（海浜図小屏風）」です。ボロボロの状態であったのを修復し、修復後の初展示となります。穏やかな浜辺の様子が描かれ、小さく人物や停泊した船が描かれています。この作品は、日本画家の荒井寛方（1878～1945）がかつて所蔵していた作品として藤沢市に寄贈されたものでした。

しかし、この作品は少々厄介なことに、描かれた年代はおろか、絵師の略歴もあまり知られておらず、本格的な調査があまりされてきませんでした。落款（絵師のサイン）を見ても、ピンと来ません。

学芸員は、そうした未知なる作品や絵師の研究も仕事の一つ。屏風調査係として、手順や方法を考えながら、この原稿を執筆しております。すると、同じ絵師の作品が都内の博物館にあるとの噂をキャッチし、他館への調査にも行くことに。果たして、この浮世絵館だよりがみなさまの手に渡る頃、屏風の真相はどれほど解明されているのでしょうか！？ 自分自身にプレッシャーをかけるオニカゲ学芸員！！ 成果は展示室にてお確かめください。



伊村栄以「題名不詳（海浜図小屏風）」



署名 落款



編集後記

江戸時代の人々は日本橋から京都へ行くまでに、およそ12日かけて旅をしたとのことですが、藤澤浮世絵館のお客様の中には、今までに東海道を歩き切ったことがあります！とお話ししてくださる方が時々いらっしゃいます（すごい！）。現在の藤沢宿周辺では、浮世絵に描かれていた風景はあまり残っていません。しかし、かすかに残る江戸時代の面影を探しながら散策すると、昔と今が繋がるような感覚に陥る瞬間があり、自分も歴史の一部なのだ実感しています。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）

【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】 [藤沢市藤澤浮世絵館](#) で検索 🔍

